

## 大震災に遭遇して

池田 光治

福島県立勿来工業高等学校 工業化学科  
〒974-8261 福島県いわき市植田町堂ノ作10

### 1. はじめに

3月11日午後2時46分に起こった東日本大震災は、東北、関東地方に甚大な被害を及ぼし、死者行方不明者は、2万7千人を超えた(3月28日現在)。特に福島県では、地震、津波、原子力事故という三重苦に見舞われ、復興への足がかりさえ、未だ見出せない事態になっている。

大震災当日、私は勤務校である福島県立勿来工業高等学校の4階におり、その後避難所で一夜を明かした。未曾有の災害に遭遇し、避難所で過ごした経験を、時系列にしたがって述べたいと思う。

### 2. 大震災の発生から避難するまで

福島県太平洋沿岸は地震が少ない地域なので、揺れを感じた時点では、いつものようにすぐに収まるだろうと思っていた。しかし、すさまじい地鳴りとともに立ってられないほどの揺れが数分間続き、職員室内の棚が倒れ、窓から見える杉林からは杉花粉が黄色い煙となって立ち上るのが見えた。本校は海から直線距離で約3kmのところであり津波の危険性があったので、生徒を誘導しながら学校裏の高台に避難した(幸いにもこの時は、授業はなく、部活動で一部の生徒が登校していた)。避難後すぐに空が暗くなり、強い風とともに雪が降ってきた。このような天候の急変ぶりはこれまで経験したことがなく、今まさに天変地異が起きていることを実感した。その後、近くの農業高等学校の体育館に避難し、そこで一夜を明かした。体育館は、最近耐震工事を終えたばかりで地域の住民の方々数百人も避難していた。

### 3. 避難所にて

震度4クラスの余震が断続的に続く中、徐々に日が暮れて寒さの増す暗い体育館には、避難してきている人たちの不安感が充ち満ちているようであった。数百人の人たちが家族や親類ごとに肩を寄せ合い、ラジオから流れるニュースに耳を傾けた。市から毛

布や布団が届けられたが、枚数は十分はなく、硬い床に長時間過ごさざるを得ない人も多く見られ、横になって睡眠をとることができず、椅子に座って一夜を過ごす人もいた。毛布一枚でもあれば、体への負担が大きく軽減されると実感した。このような状態が数週間以上続くことを考えたら、体調を崩してしまう人が続出してしまうと思った。阪神・淡路大震災でも指摘されたことであるが、大勢の人が同じ空間で長時間を過ごす場合、精神的な負担軽減から、プライバシーの確保が重要である。また、インフルエンザなどの感染症予防の観点から、適切な室温を維持しながら、換気を行う必要性を強く感じた。

### 4. 被災地の状況

私が室内環境学会との関わりを持つきっかけとなったほっき貝が採れる福島県太平洋沿岸の主要な産地は、今回の大震災にともなう津波や原子力事故によって壊滅的な打撃を受けている。焼成ほっき貝殻によるホルムアルデヒド濃度の低減効果を明らかにするためのほっき貝殻を提供していただいた南相馬市にある海産物加工場も、津波による被害を受けたと聞いている。原子力事故が早期に収束し、復興の糸口が見出せることを切に祈っている。

### 5. おわりに

今回の大震災を振り返るには、まだ尚早であろう。原子力事故はまだ進行中であり、事態収拾の目処はたっていない。原子力事故があった周辺では、遺体の収容すら行われておらず、被害の全容説明が待たれる状況である。しかしながら、この困難な時期を乗り切り、必ず復興できると信じている。最後に大震災で犠牲になったの方々に対し、心から哀悼の意を表して結びとしたい。